

木村太一の『FUJIKO』（2026年）を見て驚きを感じました。木村太一は1987年東京生まれ、映画監督を目指し12歳で単身渡英、現在もロンドン在住とか。ミュージック・ビデオと広告映像が活動のメインらしいのですが、2023年に初長編作品『AFTERGLOWS』を発表し本作は二作目です。基本ロックの人のようですが、ここでは昭和の風俗を取り入れたローカル性の高い静岡ムービーを完成させました。映像に対しての感覚は鋭く、構図とカットングそしてディープ・フォーカスの使用は綿密かつ細部への配慮を感じさせ、すでに完成された技巧と美意識、さらには見事なストーリーテリングの質の高さ感じさせます。最先端の感覚と土着性との無理のない融合を見ることができるのです。並外れた才能と手腕を備えた恐るべき人材の登場です。木村太一本人の母親の半生を描いたものらしいのですが、本人の特別な感情なり思い入れもあったことでしょう。配役の妙も感じられ、脇に竹下景子、岸本加世子、イッセー尾形に起用し、その存在感を十分に活用しています。基本インディー系の作品ではあるものの、TOHOシネマズ日比谷をメイン館に据え、Atemoという気鋭の配給会社によって全国公開を実現したそうです。そして、劇場公開から三ヶ月後の9月からNetflixでの国内見放題独占配信が開始され、なかなかスマートな出口戦略が取られていることも現代的と言うべきでしょうか。2026年の日本映画界を吹き抜ける一陣の風として。

韓国映画界の巨匠イ・チャンドン（1954-）が新作を発表したというニュースを耳にし期待が膨らむところですが、ここでは2007年の「シークレット・サンシャイン」について書いてみます。本作の英語原題『Miryang』は舞台となる「密陽市」のこと、主人公シネは不慮の死を遂げた夫の故郷であるこの街での生活の立て直しを図ります。しかし、愛児の誘拐殺害という惨事が起こり、しかもその犯人が愛児の通っていた塾の主宰者であったという二重のショックを受けます。ズタズタに切り裂かれた気持ちから抜け出すために救いとなったのは偶々の出会いのキリスト教系新興宗教でした。思わずのめり込んだ宗教の世界でシネは信仰を深め、殺人犯に対し赦しを与えることを決意し収監中の男との面会に臨むのですが、この男も収監中に信仰を深く神から赦されたと言うに至って、シネの精神は再び深く傷つき壊れていきます。劇中これほど何度も泣き叫ぶヒロインを見たことはありません。しかも、イ・チャンドンは何度も長回しで撮り続けます。救いの手段としての宗教を取り上げながらも、イ・チャンドンはそれを一つの補助線的なものとしか扱っていないように感じられます。それでも、人間誰しも持つ弱さに対し何かに頼らざるを生き方を示したものであり、生き方への問いを投げかけているものと解釈できます。これまでのイ・チャンドンの『ペパーミント・キャンディ』（1999年）『オアシス』といった作品の中での本質的な部分に共通項を見る思いがします。登場人物を決して美化することなく率直に表現することこそ、イ・チャンドンのリアリズムであり生命線ではないのかと。ここで韓国という国家、また韓国の映画事情に造詣の深い四方田犬彦の意見に耳を傾けてみることにしましょう。韓国文化の根底にあって韓国人の人格を形作っているのが「ハン」とう感情であることは知られています。この「ハン」は漢字では「恨」と記しますが、それは日本語で言う「恨恨」ではなく、むしろ実現できなかった希望や憧れを悔やみ挫折の感情

だと説明しています。そして、ある韓国文学者の謂では、それはそれは脱皮と返信を重ねてようやく生の華やぎに達することになった蝶が、その直後に蜘蛛の糸に絡まり死を目前にするときの思いだと喩えたそうです。そこから、「ハン」は肯定的に作用したとき、希望と忍耐の原理となりますが、ひとたび否定的に働くとき困難な状況を運命的なものとして諦めみずからの無力を正当化する論理へと向かうことになるというのです。そこから感じられるのは、小説家として出発したイ・チャンドンが映画を通じて行っているのは「ハン」の解きほぐしではないかということです。初期の『グリーンフィッシュ』から『ペパーミント・キャンディ』『オアシス』そしてこの『シークレット・サンシャイン』に通じるのは、時代や不条理なシステムによって希望や憧れを徹底的に壊されてしまい挫折せざるを得ない人々の「ハン」の感情のほとぼりではなかったのかと。「ハン」が理解できればシネのあの凄まじい号泣や剥き出しの叫びが、取り乱した姿ではなく、必然の表現であったことが理解できます。神や宗教でさえ救いとはなり得ない「ハン」の重みをここに感じるのです。（文中敬称略）

付) サウス・チャイナ・モーニング・ポスト掲載のゴジラ最新作のジェームス・モットラムのレビューからの抄訳

『ゴジラ-0.0』レビュー：視覚的に圧倒される日本の怪獣映画の続編、驚きに満ちた作品

2023年の『ゴジラ-1.0』が記録的な大ヒットとなったことで証明されたことがあるとすれば、それは、この往年の怪獣にはまだ十分な可能性が残されているということだ。今世紀における伝説的な巨大怪獣の復活劇は、レジェンドリー・ピクチャーズの「モンスター・バース」シリーズで同怪獣をキングコングと共演させたハリウッドと、同じくシリーズを再始動させた生みの親である日本の東宝との間で、いわば「お返し」の応酬を繰り広げるような展開を見せてきた。大きな期待を集める続編『ゴジラ-0.0』の登場だ。舞台は前作から2年後の1949年。再び山崎貴が監督を務め、前作でゴジラを撃退した元特攻隊員の敷島浩一（神木隆之介）と、その妻・ノリコ（浜辺美波）の物語が再び描かれる。「私たちはいつか平和に暮らせるようになるのだろうか？」と、物語の序盤でノリコは問いかけるが、その答えは「否」—それも断固たる「否」である。ゴジラの熱線にも匹敵する黄金の光線を放つ能力を持つ、新たな巨大有翼怪獣「ギドラ」が出現し、行く手にあるものすべてを破壊し尽くしているのだ。気象予報士が気象を利用した解決策を提案することさえある—ノルマンディー上陸作戦前夜を舞台にした近年の映画『プレッシャー（Pressure）』を奇妙な形で彷彿とさせる。他にも、アルフレッド・ヒッチコック監督の『鳥』を不気味に連想させるような、「共鳴波増幅器」を使ってカラスを建物におびき寄せるといふ、同様に突飛なアイデアも登場する。山崎氏の脚本には、再生や復讐、そしてもちろんゴジラの再登場をめぐる驚きが満載だ。『ゴジラ-0.0』は、その真価が発揮されている場面において、広島島の惨禍を強烈に想起させる作品となっています。原爆投下後の凄惨な光景を映し出す不穏なフラッシュバックもその一例だ。IMAXで撮影された映像は圧巻で、荒涼とした戦後の風景の中、ゴジラやギドラが咆哮を上げながら進む姿が鮮烈に描かれる。空中戦や破壊の描写はスリル満点で、近年の韓国SF大作『Hope』に引けを取らないほど圧倒的だ。アダム・ウィングガード監督による近年のネオン輝く『ゴジラ』映画とは一線を画す、山崎監督の芸術的な試みだ。その真髄は、登場人物の眼鏡の割れたレンズ越しに捉えられた、空を切り裂くミサイルの姿を映し出したワンショットに完璧に凝縮される。